The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	西洋における『源氏物語』の受容 : 英語訳と教育に見る
Author(s)	胡, 秀敏
Citation	詞林. 1997, 21, p. 64-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67399
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

西洋における『源氏物語』の受容

―英語訳と教育に見る―

胡　秀敏

はじめに

今世紀に至るまで、西洋人にとって日本文学のイメージは自分たちとは違う異質なものであり、そして現実的な存在ではない幻想的なものであった。さらに、地理的に遥かに離れているため、日本文学そのものの存在がかろうじて知られている程度だったであろう。ところが、経済的政治的情勢の変化とともに、近年、西洋において日本古典文学に対する関心が急激に高まりつつある。とくに一九七〇年代に入ってから、アメリカを中心にヨーロッパにおいても、日本古典に関する活発な研究活動が行われ、教育、研究と幅広い分野にわたって優れた業績があがっている。一般に、西洋において日本に関することが、すべて異国趣味と結びつけて受け入れられた時代は、日本文学が「好奇心の対象」として読まれていたことも確かである。しかし、近年の日本文学に対する研究動向は、異国文化への興味というレベルを遥かに超えたもので、古典、そして近代作品からにじみ出る主観性と普遍性に日本文学の"宝"を見出し、それを楽しみ研究するという方向に進んでいる。つまり、西洋における今日の日本文学研究は、異文化への興味、驚きに端を発し、それと自国の文化との比較対照、さらには自らの文学観による分析、と発展しているのである。

西洋人にとっても、日本人にとっても日本の古典として、まず源氏物語があげられる。世界でもっとも早く、しかも完成度の高い長篇小説として、世界の人々の意識に浸透しはじめたのは、今世紀の中頃であり、今日では平安文学の専門家から、比較文学者、歴史学者、英文学者に至るまで注目を集めている。日本国内においても、源氏物語の評価を歴史的に辿ってみれば、その評価判断の多種多様さに驚かされる。まして文化背景、価値体系の異なった西洋人が、彼ら独自の文学観をもって源氏物語を評価することは当然であろう。英語訳のおかげで、源氏物語は西洋の一般の人々にも手の届くものとなったため、英語になった源氏物語の実体、そしてその

教育の現状を分析することによって、西洋において、源氏物語がどのように受け止められているかを垣間見ることができるのではないかと思う。

一、源氏物語の英訳

現在、注目されている源氏物語の英訳は二種類刊行されている。一つはアーサ・ウェイリーという英国の学者によるもので、もう一つはアメリカのサイデンスティッカー氏が訳したものである。ドナルド・キーン氏によると、ウェイリーはまだ大英博物館版画部の学芸員であった頃、ある日、浮世絵の横に書いてある文字はどんな意味であるかと聞かれて答えることができなかった。その当時、大英博物館には日本語の分かる人は、彼を含めて一人もいなかった。これをきっかけに、彼は日本語を勉強しようと決心し、当時日本語の教科書もなかった状況の中で、数年間、独学で日本語を勉強したそうである。その一方で、ウェイリーは日本の古典を翻訳しはじめ、日本文学が世界においてまだ注目されていなかった一九二〇年から一九三〇年にかけて、ほぼ十年間の歳月を費やして、源氏物語の英訳という偉業を一人で成し遂げたのであった。[1] ウェイリーの英訳は、原文に忠実であるとは言い難く、間違いも多く見られるものの、日本の古典文学を初めて西洋に紹介し、多くの西洋人をその美的世界に誘ったという意味において、たしかに彼の業績は大きい。

しかし、すでによく知られているように、ウェイリー訳では「鈴虫」の全巻と「若菜」巻の一部などが大胆にカットされているし、各巻の断章に改竄や削除が加えられている。ウェイリー訳がすでに存在するにもかかわらず、サイデンスティッカー氏があらたに源氏物語の英訳に取りかかった主な理由の一つは、このようなウェイリー訳の不完全性にあると考えられる。新しい英訳が完成したのは一九七六年のことであり、ウェイリー訳から実に四十年の歳月が過ぎていた。この英訳はウェイリー訳と違って、基本的に原文を忠実に英訳したものであり、単なる言葉の置き換えというレベルを遥かに超えて、源氏物語の本質的事実、つまり、物語の繊細にして複雑な構成、そして登場人物の多様性を重視した名訳である。

さて、サイデンスティッカー氏が源氏物語本文を深く理解した最も典型的な例を、一つ示そう。源氏物語の美しさの一つは、作中人物と自然景物が一体になって描かれる叙情性の中に見出すことができる。その場合、自然描写が作品の芸術性を高めるのに最も重要なものであることは言うまでもない。時には、その自然描写が物語の核心へ導くまでの豊かな脈絡となっている。光源氏の人生にとって最も重要な三人の女性（夕顔・葵上・紫の上）が満月の夜を前後にして亡くなっている。特に光源氏最愛の女性である紫の上が八月十四日に

亡くなり、その日の夜から十五日の暁にかけて葬送が行われ、しかもそれは秋最中の最も美しい月の下で繰り広げられるのであった。

やがてその日、とかくをさめたてまつる。限りありけることなれば、骸を見つつもえ過ぐしたまふまじかりけるぞ、心憂き世の中なりける。はるばると広き野の、所もなく立ち込みて、限りなくいかめしき作法なれど、いとはかなき煙にて、はかなくのぼりたまひぬるも、例のことなれどあへなくいみじ。空を歩むここちして、人にかかりてぞおはしましけるを、見たてまつる人も、さばかりいつかしき御身をと、ものの心知らぬ下衆さへ、泣かぬなかりけり。御送りの女房は、まして夢路にまどふここちして、車よりもまろび落ちぬべきをぞ、もてあつかひける。昔、大将の君の御母亡せたまへりし時の暁を思ひ出づるにも、かれはなほもののおぼえけるにや、月の顔の明らかにおぼえしを、今宵はただくれまどひたまへり。十四日に亡せたまひて、これは十五日の暁なりけり。日はいとはなやかにさし上がりて、野辺の露も隠れたる隈なくて、世の中おぼし続くるに、いとどいとはしくいみじければ、後るとても幾世かは経べき、かかる悲しさのまぎれに、昔よりの御本意も遂げまほしく思ほせど、心弱き後のそしりをおぼせば、このほどを過ぐさむとした

まふに、胸のせきあぐるぞ堪へがたかりける。[2]

ウェイリー訳では、紫の上の亡くなった夜のこと、そして美しい月の光を背景に行われた葬送について何も語られていない。月を幾度も悲劇と結びつけて表現するのが、源氏物語における紫式部の手法であることは、完全に無視されたのである。よく言われるように、省略によって結果的に読みやすくなったということはあるかも知れない。しかし、紫の上の死は光源氏の人生にとって最も衝撃的な打撃であり、しのび難い悲しみであった。ここにおいて最愛の妻を失った光源氏の悲哀感を醸し出すには、美しくもあやしい月の描写は欠くことはできない。その上に、竹取物語の月夜に昇天したかぐや姫との関わりで、この部分の描写は、源氏物語の内部構造を探る時の重要な鍵として、決して見過ごせないのである。紫式部にとって、ここにある月は物語を構成する上で重要な素材であり、芸術的効果が期待される小道具であるに違いない。したがって、たとえ英語訳の美しさを保とうという意図からであったとしても、ウェイリーがそれを削除したことは、ある意味において源氏物語の美的体系を変えてしまうことになっている。一方、サイデンスティッカー氏は紫の上の亡くなった夜の情景描写に注目し、その意義を強調して翻訳のなかに反映させている。ウェイリーがこの重要な場面を省略したのに対し、サイデンスティッカー訳は、この部分の月の描写を次のように見事に描き、芸術的効果を高めている。

Everything was finished in the course of the day. We are not permitted to gaze upon the empty shell of the locust. The wide moor was crowded with people and carriages. The services were solemn and dignified, and she ascended to the heavens as the frailest wreath of smoke. It is the way of things, but it seemed more than anyone should be asked to endure. Helped to the scene by one or two of his men, he felt as if the earth had given way beneath him. That such a man could be so utterly defeated, thought the onlookers; and there was no one among the most insensitive of menials who was not reduced to tears. For Murasaki's women, it was as if they were wandering lost in a nightmare. Threatening to fall from their carriages, they put the watchfulness of the grooms to severe test.

Genji remembered the death of his fist wife, Yugiri's mother. Perhaps he had been in better control of himself then—he could remember that there had been a clear moon that night. Tonight he was blinded with tears. Murasaki had died on the fourteenth and it was now the morning of the fifteenth.* The sun rose clear and the dew had no hiding place. Genji thought of the world he must return to, bleak and comfortless. How long must he go on alone? Perhaps he could make grief his excuse for gratifying the old, old wish and leaving the world behind. But he did not want to be remembered as a weakling. He would wait until the immediate occasion had passed, he decided, his heart threatening to burst within him.(5)

紫の上が八月十四日に亡くなり、葬送が執り行われたのは十五日の暁であるのと、亡くなったのは、十四日の夜から十五日にかけてで、葬送は十五日の夜から十六日の昼に至る(5)という、紫の上の死期と葬送の日取りについて、説が分かれている。このようなことを把握したからであろう、サイデンスティッカー訳では、＊印のところについて、脚注に"There is doubt as to whether it is the fifteenth, the day of the full moon, or the sixteenth."という一文が添えられている。前述したように、この部分は、紫の上の死から葬送にかけて、時間的経過による自然の変化を記し、余情性にあふれた静かな美しさを感じさせるため、省略しては物語の情緒を乱すことになる。サイデンスティッカー訳では、このような源氏物語のもつ美的繊細さと芸術的効果が重視され、その核心部分が忠実に訳し出されている。

さらに、岩波古典文学大系のテキストを基本とするサイデンスティッカーの訳は、ウェイリー訳とは異なり、原文に忠実なだけではなく、日本における源氏物語の新しい研究成果を踏まえていることも広く知られている。現在まで英語圏での源氏物語の研究に使用されてきたのは、殆んどこの翻訳であり、また大学の教育でも使われている（ただし、最近マカローによる源氏物語の抄訳が出版され、一部の大学で教科書として使われている）。しかし、ウェイリー訳は忘れられたわけで

はない。その英訳の美しさに魅せられる人々の間には、依然として根強い人気が残っている。ウェイリー訳が素晴らしいものであるにもかかわらず、多くの問題点があり、その中でも地理に関しての間違いはウェイリーが自ら日本の文化生活を体験していなかったことに起因するものが多い。彼は一句、一句、原文に訳文を当てていくやり方に拘らなかったようであるが、このような方法では、表面の意味を伝えることができる反面、原文の芸術性を損なうことが不可避である。それにしても、これほど長大な作品である以上、誤訳があるのは避けられないことであるし、一九二〇年代当初は、十分な注釈書も、日本古典の校訂本も手許に揃っていなかったことを考えれば、ある程度の誤訳は、むしろ問題にすべきでないかも知れない。ただし、ウェイリーの源氏訳には、意識的に「文字どおりの訳」を避けている例が無数にあるため、その省略は、時には紫式部の繊細な描写をかき乱し、結果として物語の基本形式を変えてしまうことにもなりかねない。そういう意味においては、サイデンスティッカー訳の出現によって、英語圏の読者がより原文に等価な英語訳源氏物語を鑑賞できるようになったと言えよう。

二、和歌の英訳について

源氏物語の和歌の翻訳において、現代日本語に訳される場合でも、和歌を通釈したものと、和歌の原文をそのままにして注釈をつけるものとがあるものの、現代日本詩に訳されたものは見当たらない。英語に翻訳する場合は、和歌も当然ながら訳さなければならない。全般に和歌の英訳を避けているように感じられるウェイリー訳に対して、サイデンスティッカー氏は積極的に和歌を訳している（ウェイリー訳は和歌が散文の部分と区別されないことが多い）。例えば、サイデンスティッカー氏は和歌の上の句、下の句を二行に分けて英語に訳しているし、いわゆる二字下げで改行することによって和歌であることを示している。現在では和歌の五、七、五、七、七という韻律を響かせるように、一句ずつ五行の英語に訳し、同時に五、七、五、七、七を英語の音節に生かし、それぞれ五音節、七音節になるように翻訳上の工夫が凝らされているものもある。マカローの『古今集』訳はその好例である。[6]

さて、サイデンスティッカーの和歌英訳は散文と区別しやすいように改行して、各歌を二行詩にまとめているが、原歌の意味をどの程度伝達しているのであろうか、その具体像を「桐壺」巻の例で見てみよう。「桐壺」巻において、サイデンスティッカー訳は十六箇所に注釈があり、その大半は引歌の指摘に労力が注がれ、和歌九首に対して五箇所の注釈が施されている。それらの和歌がどのように処理されているのであろうか、九首のうち、検討の対象となる五首を次に引用し

ておく。

① 限りとて別るる道の悲しきに
いかまほしきは命なりけり
"I leave you , to go the road we all must go.
The road I would choose, if only I could , is the other."

② 宮城野の露吹きむすぶ風の音に
小萩がもとを思ひこそやれ
"At the sound of the wind, bringing dews to Miyagi Plain,
I think of the tender *hagi* *upon the moor."

③ 鈴虫の声の限りを尽くしても
長き夜あかずふる涙かな
"The autumn night is too short to contain my tears,
Though songs of bell cricket weary, fall into silence."

④ いとどしく虫の音しげき浅茅生に
露おきそふる雲の上人
"Sad are the insect songs among the reeds.
More sadly yet falls the dew from above the clouds."†

⑤ 尋ねゆく幻もがなつてにても
魂のありかをそこと知るべく
"And will no wizard search her out for me,
That even he may tell me where she is?"

サイデンスティッカーの和歌英訳は殆んどリズムが感じられないが、散文でない二行詩になっていて、この方針が全篇を通じて守られている。和歌を一つの形に整える意味において、散文と混同するウェイリー訳より一歩進んだと言えよう。しかし、統一した形になっていて、かつ英語が優れたものであっても、和歌に含まれている豊かなイメージの総体がどこまで読者の胸に届くのであろうか。まず、言葉の表現について②番の歌を見てみよう。帝の愛を独占したために、同輩の憎悪の的となり、さまざまの陰湿な迫害にあって、桐壺の更衣はついに死を免れることができなかった。野分の激しく吹き出す夕月の美しい夜に、帝はつねにもましていろいろと思い出されることが多く、亡くなった更衣の里へ靫負命婦を遣わして、母君を慰め遺児若宮の参内を促した。②番の歌は命婦に託した母君への手紙のなかに含まれ、若宮の身の上を案ずる帝の気持ちが詠みこまれている。掛詞や縁語という和歌の技巧が散りばめられて訳しにくい一首と言えよう。

サイデンスティッカーの訳は原作の歌の内容を簡潔に再現しているとは言え、少し物足りないような感じがしないでもない。「宮城」は宮城県仙台市の東にある野であり、萩の名所であるが、ここでは「宮中」の意味に用いられていることは言うまでもない。「萩」は秋に紅葉色、白色の小花が並んで咲くという意味の和製漢字であると指摘され、[7]「小萩」に子供をかけ、具体的には若宮を指すことになる。英訳の第二行は下の句に相当し、"I think of the tender *hagi* upon the moor"の"upon the moor"（荒れ地に咲く）は原文にないものである。

"Miyagi Plain"に対応するという配慮から使われているのであろうが、若君の住む更衣の里が蓬生の生い茂る邸であるのは、母君の悲しい暮らしぶりを表しているため、英語の"moor"は"荒涼たる"イメージがあり、"tender *hagi*"が"若宮"である以上"荒涼たる荒れ地"と訳すのは若宮の高貴な身分に相応しくないであろう。さらに"宮城"は「宮中」を響かせていること、それに対して"tender *hagi*"は更衣の里にいる"若宮"を指すことであるという注釈があれば、読者にとってより親切であるように思われる。残念ながら脚注には、"*Lespedeza japonica*, often called bush clover"とあるだけで、これ以上の言及はない。

こうした具体的な問題もさることながら、一つの表現をめぐる日英のコノテーションの相違、そして敬語、助動詞の微妙なニューアンスは、終始翻訳につきまとう難題である。しかし、和歌の翻訳で最も難しいことは、なんといっても掛詞の処理であろう。例えば、①番の「いかまほしき」の掛詞に含まれる「生く」と「行く」はあらわに訳されず、"the other road"と意訳されているだけである。また、③番の「ふる」は「降る」に「振る」をかけているが、この歌については、上の句と下の句が逆に訳され、下の句に含まれている「鈴虫の振る」と「涙の降る」は、それぞれ一行目と二行目の内容に盛り込まれ、完全な意訳だとしか言えない。そして、④番の歌は靱負命婦が帝の使者として桐壺更衣の母を訪れ、いろいろ話し合ってから宮中に戻ろうとした時に詠んだ歌に対する更衣の母君の返歌である。亡き娘のことを思い、悲しみの涙に明け暮れる意味が込められており、虫の音には母君の泣き声がかけられていることは言うまでもない。英語の一行目"Sad are the insect songs among the reeds"は、掛詞の含まれる上の句に当るが、虫の音に隠喩された母君の気持ちは読み取れない。二行目の"Sadly yet falls the dew from above the clouds"は下の句に相当し、雲の上から露が落ちてくるので、一層悲しくなるというのである。ただし、この歌については、脚注に"A Sad message comes from court to join the sadness already here"という巧妙な一文が添えられ、和歌を挟んだ前後の文脈と考え合わせれば、宮中人の来訪と母君の涙との関係がはっきりしてくるため、この脚注によってはじめて④番歌の英訳が生きてきたように思われる。

また、⑤番歌の前に「かの贈り物御覧ぜさす。亡き人の住処尋ねいでたりけむ、しるしの釵ならましかば、と思ほすも、いとかひなし。」という文章がある。この部分の英訳は"looking at the keepsakes Myobu had brought back, he thought what a comfort it would be if some wizard where to bring him, like that Chinese emperor, a comb from the world where his lost love was dwelling. He whispered:"となっており、最後の"like"以下は「しるしの釵ならましかば」に当るが、ここにかなり説明的付加があるのは興味深い。本来なら脚注にあってもいいような部

分を、このように訳文のなかに融合させてしまう例は、他にも多数存在する。作品のイメージが読者の胸に届くのであれば、それも一つの手段だと言えるが、ただ、ここに「かひなし」の一文が訳されていないのが残念なように思われる。なぜなら、この「かひなし」は次の「尋ねゆく…」に含まれる帝のやりきれない気持ちに深い関わりがあるからである。

サイデンスティッカー二行詩訳では、基本的に一行目は上の句に相当し、二行目は下の句に当るが、③番歌のような逆の場合もある。この形式は上の句と下の句の区別がはっきりして、ごたごたするのが避けられた反面、淡々として詩のリズムが感じられない。しかもこの二行詩訳形式の弱点は、使える語彙が限られることにあり、原歌のもつ豊かな意味を十分訳し出せない場合がある。

短い三十一音節の中に、豊かな内容を盛り込もうとすると、日本的な余情、余白ともいうべき、語られない部分にまで意味を持たせる結果となる。和歌を現代日本語に訳す場合でさえ、意味の確然としない箇所については言葉の選択に苦心するのであるが、まして異質の言語と文化を背景とする外国人による理解の範囲には、限界があることは否定できない。この場合は、日本語のニューアンスの難しさもさることながら、もっと根本的な、言葉に織り込まれている価値観の相違には戸惑ってしまう。それにもかかわらず、訳者が和歌を積極的に訳し出す場合、掛詞など原歌の修辞技巧を無理に訳し出すよりも、むしろ合理的な意訳を行い、さらに④番歌のように適切な脚注を付けることによって補うのが妥当な処理だと言えよう。

三、源氏物語の教育

源氏物語の英訳が世に現れて以来、西洋において、その作品に描かれる平安時代に生きた女性に対する関心が急に高まり、ついに源氏物語が基本的な教養書の一つとして、大学の教育現場で取り上げられるようになった。そして、源氏物語に代表される日本古典文学は、日本文学研究の専門家だけではなく、広く歴史学、比較文学、さらにアジア研究学といった分野からも注目を集めてきている。これに関連して、カナダのブリティシュ・コロンビア大学を例にとって、日本古典文学はどのように教授されているのかを探ってみたい。

当大学には日本文学専攻科目はないが、人文学部の中にアジア研究という学科があり、アジア諸国の歴史、文学、文化、社会などの分野に分かれている。学生は二年間、中国語か日本語を勉強し、日本語に自信のある学生だけが日本文学に関する科目を選択するという傾向になっている。北米の大学で普通、学部生に日本の古典を教える時はもちろん英訳されたテキストを使うが（学生は殆んど日本語に関する知識がないからだ）、大学院の学生を対象にする場合、授業は英語で進

められ、テキストは日本語の原典を使っている。例として上述の大学で、一学期間に対して組まれた日本古典文学に関する教授シラバスを挙げておく。

I ・Ancient Period (- 794)

① *Kojiki* (ca .712)(reader)
SECONDARY: Philippi; Naumann; Nakanishi; Konishi I : 156 - 200;

② *Manyo Shu* (ca .759)(Carter)
SECONDARY: Levy (1984); Ebersole(1989); Nosco(1986); Rutledge; Akima
Kaifuso (ca .752)and Poetry in Chinese(reader)
SECONDARY:Borgen (1986); Doe(1982); Keene (1993),62 - 84

II ・Heian Period (794 - 1185)

③ *Taketori Monogatari* (mid - 10th cen .)(reader)
SECONDARY: Marra; Okada; Kristeva; Keene (1993),434 - 41

④ *Ise Monogartari* (ca .950)(reader)
SECONDARY: Marra; Bowring; McCullough,

⑤ *Kokinshu*(ca .905)(Catter)
SECONDARY:Konishi (1978); Wixted; McCullough,Brocade; Ueda; Morris (1986)
Tosa Nikki (936)(reader)
SECONDARY: Viswanathan; Miner; Miyake; Harper

⑥ *Ochikubo Monogatari* (ca .986)(reader)
SECONDARY: Wm .McCullough; Dundes; Mauclaire; Wakita

⑦ *Kagero Nikki* (ca .972)
PRIMARY: Seidensticker,*The Gossamer Years*
SECONDARY: Watanabe; Sarra; Mostow

⑧ *Makura no Soshi* (ca .1001)
PRIMARY: I .Morris,*The Pillow Book of Sei Shonagon*
SECONDARY: M .Morris(1980)

⑨ *Genji Monogatari* (ca .1006)
PRIMARY: McCullough,*Genji& Heike*: Selections
SECONDARY: Shirane; Field

⑩ *Genji*, Continued

⑪ *Izumi Shikibu Nikki* (ca .1008)(reader)
SECONDARY: Cranston; Walker; Miner; Wallace

⑫ *Konjaku Monogatari*
PRIMARY:Ury; Tales of Times Now Past
SECONDARY:Kelsey, Wilson, Pandey

この教授シラバスからも明らかなように、日本文学における一次的読物の範囲が広く、なかには批評的紹介論文もかなり含まれているのである。これは、日本古典文学作品が西洋の学者によって広く紹介され、盛んに研究されていることを

反映したものだと考えられる。このシラバスは一学期分の授業内容として学部生を対象に設定したものであり、授業は、他に近年出版された平安文学に関する研究書なども参考にしながら行われている。二学期分も含めると一年間で『古事記』から『雨月物語』までの日本の古典を学ぶ相当ハードな内容となっているが、学生は自分で選んだ作品を英訳で勉強し、それぞれ割り当てられた論文を事前に読んで、その論文の紹介と批評をクラスで発表し、学期末には研究小論文を提出しなければならない。そしてクラスでは学生同士、学生と先生との間につねに活発な意見交換が行われ、自国との文化的背景の相違を乗り越えて、日本の平安文学の特殊性に多大なる関心を示しているようである。

ところが、日本文学を勉強する学生にとって、まず直面しなければならない問題は、他の外国語よりも数倍難しい日本語の習得である。日本語を母国語としていない多くの学生が二、三年間の学習で現代文学作品を辞書に頼りながら読めるようになることを要求されているし、日本古典文学のコースを選択する場合は、少なくとも一年間、文語を履修することが義務づけられている。

学生の方は、卒業する前の二、三年間を日本で過ごし、その間、英語を教えながら、日本人と積極的な交流をすることによって、日本語の会話も自然と流暢になり、読解力に優れる人も少なくない。大学院生は、日本滞在中に学位論文をまとめるのに必要な資料を集め、そして日本人の先生からも有形、無形の指導を受けて日本文学に対する理解をさらに深めていく。日本語教育についても、各大学において正規のカリキュラムに組み込まれているほかに、日本語の集中コース、とくに人気の夏期集中コースが盛んに行われている。日本語教育における方法や、教材もめざましい進歩を遂げ、以前と比較できないほど、日本語が習得しやすくなったことは事実である。このような充実しつつある日本語教育自体が、外国人に対する日本文学教育を支えるなによりも重要な柱の一つであると言えよう。

さて、日本文学を教えるに当たって、各大学ともそれぞれ得意とするものが異なっていることは言うまでもない。これは日本と同じように教授陣の専門によって左右されるからである。しかし、日本文学の研究者が大勢輩出されている現在では、各大学において古典と近代、もっとよい所では、平安、鎌倉とさらに細かく研究分野が分かれて、学生にとっても恵まれた教授陣の指導のもとで、好みの分野を選んで研究することができるようになってきた。大学院生を対象に原典を読む場合、数多い古典作品の中から、どの作品を選ぶかは普通、その大学の教授陣の専門によって決定するが、大概の場合、大学院生の学位論文のテーマに合わせて講読する作品を選ぶ傾向がある。あるアメリカ人教授のアンケートによると、日本文学を勉強している学生のうち、六〇パーセントの

人が英訳で源氏物語を通読したことがあると答えたそうである。そして、源氏物語を英訳で読んだ学生が、その作品の書かれている言語である日本語を改めて勉強したいという意欲がかきたてられるに至った例も少なくない。しかし、大学において、源氏物語を原典で読むにしても、どの巻を選べばよいのかがまず問題である。大体、源氏物語は登場人物の関係が複雑で、どの巻を選んでいても、登場人物についての予備知識が必要とされるからである。したがって、あらすじの面白い巻や、一学期で読み終えることのできる巻など、学生の興味をそそる巻選びにかなり苦心しているようである。

中国文学では、情緒だけ描いて思想に触れない文学は評価されないが、日本文学は、逆に芸術性を重んじ、思想性にはあまり関心を示さない。このことは、中国と日本の伝統的文学観の違いに起因するものだと言えよう。西洋はどうであろう。芸術性もさることながら、思想性、とくにフェミニズムを盛んに唱える西洋においては、光源氏のような恋愛遍歴者の人格や、兼家に代表される一夫多妻制に対する性差別に敏感な現代学生の反応が、特に注目される。ところが、学生の大半はむしろ、源氏物語に描かれている女性のあまりの従順さと弱さに驚きと怒りを示す。『蜻蛉日記』の場合は、作者、道綱母が日記の冒頭でこれまでの宮廷物語への不満を述べ、貴族の女の一生は実はどういうものかを描いてみたいと書いている。時の権力者である兼家の妻として自らの不幸な結婚生活を、あくまで事実に即し、詳細に告白しようとする作者の姿勢に触れたとき、学生の間から、そんなに苦しくて悲しんでいるのなら離婚すればいいじゃないかという苛立ちの声、憤慨の声が上がる。しかし平安時代の文化的背景、貴族の生活習慣を学ぶことによって、学生が次第に文学作品に描かれた人物、特に女性像に親近感をおぼえ、平安文学の特殊性にさらに関心を持つようになっていくのである。

外国の大学院で、西洋文学を専攻する場合、必修科目の一つに批評史というものがある。これを重要な軸として学生は自分自身の批評方法を確かめ、次第に批評態度と批評能力を養成していく。日本古典文学を勉強する学生は、全く異なった時代、異なった文化背景に属する作品を鑑賞し、批評することになる。したがって、戸惑いを感じる反面、それまで培われてきた同種の文化に対する批評の方法も自然と変わってくるであろうし、日本国内にいては気づかない斬新な発見も現れてこよう。そのような意味において、日本人とは全く違った角度から、源氏物語等の古典作品を捉え、その価値と面白さをより幅広く、より普遍的基準に基づいて再評価することが期待できよう。

おわりに

アメリカではMLA（The Modern Language Association of America）

という、文学教育者を対象にする学会から、一九八〇年以降、『世界文学教授の手引き』が発行されている。そのシリーズの第四十七巻目は源氏物語についてである。それまでは西欧文学しか対象にされず、古典、現代を問わず日本の文学作品は全く無視されてきた。ところが、一九九三年度にはじめて源氏物語、そして、紫式部が取り上げられるようになった。これは源氏物語が世界文学としての価値を認められたことを意味し、西洋における日本文学の受容史の上で、時代を画する出来事と言っても過言ではない。もちろん、このような時を迎えられたのは、ウェイリーや、サイデンスティッカー氏のような、多くの優れた翻訳者と研究者の日本古典文学への精力的な取り組みが成果をあげたからである。

また、源氏物語だけでなく、西洋における平安女流日記文学に対する関心も急激に高まりつつある。とくに『蜻蛉日記』や『枕草子』などの女流日記の英訳が続出し、時代的、文化的相違を乗り越えて、主観性と普遍性に充ちた日記文学は、西洋の一般読者からも注目を集めている。日本の国文学者の研究成果を踏まえてキーン氏は、源氏物語を古物語より女流日記に多く負った作品とし、女性が私的な考えを日記に書き記す伝統がなければ、紫式部も源氏物語を書けなかっただろうと指摘し、[8] サイデンスティッカー氏は『蜻蛉日記』の解説で、巻三のリアリズムを高く評価し、源氏物語と同じレベルにまで到達していると論じている。[9] また、自らの不幸な体験を赤裸々に告白する日記文学の特徴を"不満の美学"と意義付ける西洋学者もいる。[10]

このように、日本の古典はすでに母国を離れて、世界の古典として脚光を浴び、西洋各国において極めて実質的な研究基盤が作られつつあり、これからの若い研究者の積極的な活躍も十分保証されることになろう。世界における日本文学への関心は、これからますます高まっていくであろうし、より充実した翻訳、教育、そして研究が進められるに違いない。

注

(1) ドナルド・キーン『古典を楽しむ』(朝日選書三九三　平成二年一月)

(2) 新潮日本古典集成『源氏物語』六「御法」一一七―一一八頁(新潮社　昭和五十七年)、以下源氏物語本文の引用はこの本に拠る。

(3) Edward G Seidensticker, *The Tale of Genji* (719-720) (New York; Alfred A・Knopf, 1976), 以下サイデンスティッカー訳の引用はこの本に拠る。

(4) 注(2)に同じ。「御法」一一七頁の頭注。

(5) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第九巻「御法」九四頁(角川書店昭和四十二年七月)

(6) Helen Craig McCullough, Genji & Heike; *Selections from* The Tale of Genji *and* The Tale of the Heike (Stanford: Stanford UP, 1994)

(7) 林福水「『源氏物語』の中国語をめぐる諸問題―桐壺の巻を中心にして―」(『梅光女学院大学公開講座　論集第二五集

「源氏物語」を読む』所収　笠間書院　平成元年九月）

（8）ドナルド・キーン著　土屋政雄訳『日本文学の歴史　古代・中世篇3』（中央公論社　平成六年九月）

（9）Edward G Seidensticker "The Gossamer Years"; The Diary of a Noblewoman of Heian Japan (Tuttle Tokyo, Japan 1964)

（10）Michele Marra "The Aesthetics of Discontent"; Politics and Reclusion in Medieval Japanese Literature (Honolulu Hawaii UP,1991)

参考文献

1 武田勝彦編著『古典と現代―西洋人の見た日本文学―』（清水弘文堂　昭和四十五年六月）

2 中西進、松村昌家編『日本文学と外国文学―入門比較文学―』（英宝社　平成二年八月）

3 マイケル・ワトソン、緑川真知子「世界文学としての平安文学―欧米における研究の現在―」（『論集平安文学　二　東アジアの中の平安文学』所収　勉誠社　平成七年五月）

＊なお、この論文の執筆にあたって、ジョシュア・モストー氏（ブリティシュ・コロンビア大学）から貴重な助言と教授シラバスを提供していただいた。記して感謝の意を表したい。

（こ・しゅうびん　昭和女子大学講師）